

# 茶の湯文化学会会報 No.77

第77号 / 2013年6月28日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

茶の湯文化学会の四代会長を、はからずもお引き受けすることとなり、あらためて学会の創立当時の昔語り、これからの学会に期待するところを綴っておきたいと思います。

創立二〇周年という節目を迎えた学会ですが、その前史がさらにあります。今から思えば四五年前のことです。一九六〇年代の後半、茶の湯研究をめざす学生が各地に生まれていました。東京では筒井絃一さんと私が茶の湯研究の雑誌を作ろうと相談していたのが一九六八年頃です。ちょうどその頃、東京で開かれた裏千家の学生茶道の会に、京都からさっそうとやってきて講演したのが谷晃さんでした。まだ学部の子生だったかと思えます。それ以外にも、私たちの知らないところで様々の動きがあったでしょう。

筒井さんと私が企画した雑誌「茶湯・研究と資料」の第一号が出版されたのが一九六九年。やがてここに茶の湯研究を志すメンバーが集まって木芽文庫の茶書研究会が始まりました。その後で場所は東京と京都の二ヶ所に分かれ、京都の研究会は四〇年続いて、今も月一回の史料を読む会が続いています。当時、力不足を感じていたわれわれは、もっとしつ

茶の湯文化学会のごし方・ゆく末  
熊倉 功夫



総会で挨拶される熊倉功夫新会長

かりした学会を作りたいと思ひ、いろいろ構想しましたが、何といつても微力で形を成すに至りませんでした。ただそのメンバーの誰もが茶の湯に対して強い思いを抱いていたことだけは確かでした。単なる研究に終わるのではなく、現実に生きている茶の湯といかにコンタクトするか、その微妙な一線をいつも意識して物を調べ物を書いてきました。

一九九二年頃、にわかに学会設立の機運が盛りあがります。ちょうど私も筑波から京都へ居を移した頃で、その流れに参加しました。今度は、茶の湯研究の大先輩である中村昌生、林屋晴三、村井康彦、倉沢行洋先生方も学会設立のリーダーシップを取られたものですか、あれよあれよという間に誕生するに至りました。顧問として入っていた林屋辰三郎先生に学会設立の相談に参りましたら、先生曰く「そんなもん作らなくても芸能史研究会の一部門にしたらええやないか」。先生の芸能史研究会は、当学会ができる前には重要な茶の湯研究発表の場でしたし、会員不足に悩んでいた芸能史研究会としては糾合したかったでしょう。それを説得して茶の湯文学化学会にご賛同いただきました。永島福太郎、芳賀幸四郎の諸先生も顧問格でご参加いた

きました。

学会設立の趣旨は当時の文章に明らかですが、その背後に、茶の湯研究が自立した学問の一ジャンルとして市民権を得ること、茶の湯研究の講座をもつ大学が登場すること、茶の湯研究を専門とする研究者がアカデミックな研究職につける環境を作ること、がありました。そのために学会誌を整備し、査読制度を設けることにもなりました。その結果、まだ不十分ではありますが、茶の湯研究の中から選んだテーマで学位取得する例が最近では毎年のようにあらわれ、そのうちの何人かは大学で教鞭を取るに至っています。こうした茶の湯の研究層の拡大は、従来の茶の湯研究の限界を破り、多角的かつ実証的なすぐれた研究を輩出しています。その成果の結果が今回出版された『講座日本茶の湯全史』全三巻です。

二十年間の茶の湯文学化学会の歩みは、一見、順風満帆のようですが、決してそうはいえません。二十年を経て、マンネリ化の傾向は否定できません。ここ数年、会長をはじめとするコアになる副会長、理事の努力によって会誌、会報が本来のペースを取り戻し、何よりも各支部の研究会が活発に行なわれているこ

とはすばらしいことです。これからはその質が求められてゆくことになりましょう。われわれは常に資料と対面しながらその中から課題を発見し、課題を自分の問題意識として論理化し、さらにその新しい意識のもとに資料と対面するという繰り返しを続けていく必要があります。単に既存の説を批判するための批判で終わってはならないのは当然で、あらたな知見の提示であることが大切です。

そのためには、講演会形式の研究会も必要ですが、討論に多くの時間をさくような方法論をきたえる研究会も必要でしょう。本当に会員が求めているところは何か、これから考えてみたいと思います。

茶の湯文学化学会の大きな特徴は、茶の湯の研究者ばかりでなく、茶の湯の実践者がたくさん加わっていることです。ここに本学会の健全さがあるかと思ひます。茶の湯を実践する人々は、茶の湯に対して深い愛情を持つ人びとです。研究の原点はここにあると思ひます。茶の湯という研究対象に愛情を持つからこそ、研究は生彩を帯びます。研究者はそのことを実践者から学ばねばなりません。逆にいうと、実践者は機会あるごとに、研究者を茶の湯の現場に誘っていかなければ、相

互に刺激することにならないと思ひます。

かつて昭和初年に活躍した西川一草亭は、小宮豊隆や堀口捨己、肥後和男といった若手の研究者を茶の湯の場に誘って、その結果、昭和十年ごろの茶の湯研究の黄金時代を現出させたのです。もちろん一草亭個人の力ではないにしても、そういう場を提供する茶の湯者がいろいろいて、研究は推進されました。茶の湯文学化学会の会員構成は、まさに、そのことが実現できる要件をそなえています。「初心忘るべからず」とは、毎日毎日が初心である、という意味です。二十年の営みを切らさずに、初心をもつて進みたいと思ひます。

## 理事會

平成二十五年度第一回理事會が、四月二十七日(土)午後二時から、池坊短期大学第二会議室で行われた。理事十九名が出席し、以下の議題について討議がなされた。

- 一、平成二十五年度総会・大会について
- 二、役員改選・役割分担
- 三、会報・会誌について

## 四、その他

第一号議題では、総会議案「平成二十四年度事業報告・決算報告」および「平成二十五年度事業案・予算案」の内容について審議が行なわれ、前者では、事業報告・決算報告とともに、原案資料に基いてひと通りの説明と報告がなされ承認された。また後者では、各事業案について担当理事から説明がなされ、総会・大会についてはスケジュールの最終確認、例会・会報・会誌については年間予定の説明、研究会については、研修予定先である中国西安の最近の社会情勢の変化から、申込者数が十五名以下であれば延期もありうる旨、併せて説明がなされた。予算案については、谷端副会長から説明がなされたが、熊倉理事より、維持会員のあり方について見直しをしてはどうかという提案があり、今後、見直しの方向で審議を継続すること併せて承認された。

第二号議題では、熊倉理事から、役員案・役割分担案の提案があり、案のとおり承認された。

第三号議題では、前回理事會からの懸案である、会誌・会報の発行体制の見直しについて、日向理事からの提案をもとに審議された。提案では、現行は会誌年一回・会報年四

回の発行だが、論文発表の機会を増やすために、会誌年二回・会報年二回に変えてはどうか、というもので、これに対し、論文数の増加の可能性、論文の質の保持、論文補填の方法、例会発表から会誌投稿への連続性、などの点から種々意見が出た。これらの意見を前提にして、新役員体制下で継続審議することになった。

「四、その他」では、『講座 日本茶の湯全史』(全三巻)の進捗状況については田中理事から説明があり、第一巻については、総会・大会に合わせて刊行予定であるということであった。

## 總會

平成二十五年度総会は、六月九日(日)、大会研究発表会場と同じ石川県教育会館で午後一時から影山理事の司会により行なわれた。はじめに神谷理事が満場一致で議長に選出され、その後は神谷理事により議事が進行された。第一の議題、平成二十四年度の事業報告および決算報告で、それぞれ説明が行な



総会の審議の模様

われたあと、監査報告が行なわれ、拍手で可決・承認された。

次に第二の議題として平成二十五年度の事業案および予算案が提案され、総会・大会、研究会、各地区の例会予定、会報・会誌の発行計画、収支案等の説明がなされ、これもともに異議なく全会一致で承認された。

最後に、第三の議題として役員改選案が説明され、拍手をもって承認された。これを踏まえて熊倉功夫新会長以下役員が承認され

十一年（一五四二）四月三日、紹鷗の茶会に用いられた。その後の茶会記や名物記の記述を追っていくと、それらが茶人たちの間で高く評価されたものであったことがわかる。

この紹鷗の占切水指は、やきものの南蛮物の初出として注目される。『茶湯図』（竹園文庫蔵、矢野環『君台観左右帳記の総合研究』所載）には、紹鷗所持と考えられる占切水指が図入りで掲載され、文章による説明とあわせて貴重な情報が得られるが、これによると、もとは煮炊き用の器かと思われる形状で、作為的な装飾性は無く、器の表面に生じた発色の違いや、口部の「しめきりやう」が鑑賞のポイントとなって選り出された器であったとわかる。占切タイプの器は、紹鷗の後、堺の茶人たちを中心に流行したようである。

このような事例から、南蛮物の評価基準は十六世紀中頃までに紹鷗の所持道具により定まり、その後普及したのではないかと考えた。

（平成二十五年四月二十日）

「喫茶往来の善本について」

高橋忠彦

『喫茶往来』の前半は都の会所における茶会の様子を描き、後半は五種の茶の批判の具

た。

なお、総会で承認された役員の一覧は下記のとおりである。（敬称略・五十音順）

会長

熊倉功夫

副会長

竹内順一

中村利則

参与

倉澤行洋

谷 晃

筒井絃一

戸田勝久

中村昌生

林屋晴三

理事

尼崎博正

飯島照仁

池田俊彦

岩崎正彌

影山純夫

神谷昇司

小西茂毅

佐藤豊三

高橋忠彦

谷端昭夫

谷村玲子

佃 一輝

中村修也

中村羊一郎

名見耶 明

永吉深滋

原田茂弘

日向 進

松阪富美子

H.S.Hennemann

堀内國彦

美濃部 仁

矢野 環

山田哲也

吉井 清

体例である。従来は群書類従本が底本とされ、その訓読や翻訳が使用されていたが、テキストに誤りが多いため、研究が阻害されてきた。最善本は、明暦二年（一六五六）写の謙堂文庫本である。

その他、写本の宮城県図書館本があり、古風を存するものの、善本とはいえない。加賀田氏個人蔵という写本が存在し、室町初期のものといわれている。しかし、内容構成が他の諸本と甚だしく異なる上、「釈迦」と「観音」とあるべきところを「李老」と「仲尼」に作る。これは江戸の趣味に合わせた改竄であろう。

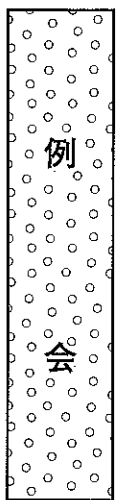
一般に信用されている群書類従本は、謙堂文庫本と比べて随所に異動がある。いちいち比較すると、前者が正しく、後者が誤っているというケースが多い。三十輻本もあるが、『群書類従』を下敷きにして、さらに誤りが多い。『喫茶往来』の翻刻は、二種類ほど存在したが、底本が劣っているため、学術的な使用には耐えない。

謙堂文庫本が優れている点が多いが、最も顕著な例は、その「前朝陽、後対月」という句を、他の諸本では「前重陽、後対月」に誤っていることである。これは、禅僧の修行を励ます内容の偈を絵面にした「朝陽図」と「対

監査

小川後楽 吉永清志

（敬称略）



東京例会

（平成二十五年一月十九日）

「南蛮物の茶道具

——武野紹鷗の時代を中心に——

宇野千代子

茶の湯において「南蛮物」と称する道具類は、十六世紀中頃の西洋との出会い以前より「南蛮」と呼ばれた東南アジアや中国南部のあたりから到来した物を指し、「見立て」という茶道具特有の価値観に深く関わっている。

本発表では、武野紹鷗（一五〇二〜一五五）の所持した南蛮物のうち「占切水指」と「棒先建水」に注目し、それらがどのような基準によって選ばれ、当時の茶人たちにどのように評価されたのかについて考察を試みた。

占切水指と棒先建水は、『松屋会記』天文

月図」を、前後に配置することをいう。ここから、前が東、後が西を指すこともわかり、北面に掛けられた釈迦三尊像（張思恭の彩色）、南面の観音（牧溪の墨絵）、それを挟む寒山拾得図など、絵画の配置が正確に記されていることが読み取れる。謙堂文庫本に基づく翻字と詳細な校勘記を、東京学芸大学の紀要で、最近公表したので参照されたい。

『喫茶往来』が十分に活用されない理由は、語句の難解さにもある。「呉山千葉（無錫患山の池に生ずる千弁の蓮華）」とか「海岸六銖之香（天竺の南海岸に産するきわめて高価な梅檀）」といった表現は、室町期には常識であったのだろうが、『大漢和辞典』や『漢語大詞典』にも見えない。これらの語句を理解しないと、室町初期の茶が、唐天竺の趣味を色濃くとどめていたという、肝心な点を見過ぐすであろう。

後半の五種の茶の批判も、謙堂文庫本で読めば、本非の別、産地、茶摘みの時期と使用する部位を明示し、最後にランク付けを下すという、一種の定型が存在したことを読み取れるのである。

東海例会

(平成二十五年五月十一日)

「曜変の再現研究と瀬戸の伝統」

長江惣吉

現在までの、曜変(曜変天目)の再現と称する作品の大半は重金属の光彩技術によるもので正しい再現ではない。重金属の光彩の大半は十九世紀以降に開発された現代の技術であり曜変の作られた宋代にはありえない。重金属の光彩は経年の劣化や酸・アルカリに弱く脆弱である。重金属の光彩作品を胃酸程度の酸性液に一週間漬けると光彩は滅失する。曜変は作られてから七五〇年以上が経過しているが光彩の劣化は無い。曜変の光彩技術は酸性ガスの化学反応である。酸性ガスの化学反応は焼成時の冷却段階の九〇〇〜七〇〇℃に窯中に燃料の薪と共に酸性物質を投入するものである。酸性物質が分解して酸性ガスが発生し、釉面に化学反応を起こし光彩が生成する。この光彩は劣化しにくく酸性液の実験でも劣化は起きず、曜変の特徴と一致する。また、曜変が作られた建窯窯址には白変の陶片が存在する。白変は酸性ガスの化学反応の過剰によって釉面が腐食したものである。同じ白変が筆者の実験でも出来ており建窯窯址

の陶片と酷似する。建窯周辺にはこの反応の原料の螢石や閃亜鉛鉱の鉱床があり、筆者は二十七回に及ぶ建窯窯址の調査で宋代の廃棄層中に砕かれた螢石が存在するのを確認した。白変の陶片と螢石は宋代建窯における酸性ガスの化学反応の証拠である。曜変は宋代建窯の作であり、光彩の劣化がないことから酸性ガスの化学反応と推察される。筆者はこの研究結果を日中の学会で発表し、中国科学院から曜変の共同研究の申し出を受けている。

北陸例会

(平成二十四年九月十五日)

宮田小文法師と西行庵の再建

前田清彦

「願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月のころ」  
漂泊の歌人として知られる西行の終焉の地、京都市東山区「西行庵」。明治二十六年(一八九三)、当時荒廃していたこの西行庵を再興した人物が福井県鯖江市出身の宮田小文法師(本名・宮田安治郎 一八五二〜一九二九)である。

当時の京都は幕末明治維新の動乱で荒廃しており、二年後に予定されていた第四回内国

勸業博覧会に合わせて名所・旧跡の復興再建が計画されていた。西行庵もその対象となり、京都市役所の公募に県会議員・僧侶など四名が手を挙げるなか、宮田がその任を負うこととなる。当時の宮田は呉服地を扱う商売しながら風流を愛し、茶道も修める一方、自宅を新聞無料閲覧所として開放し、側溝蓋の設置を役所に建白したりと、篤志家としての行動で知られていた。

西行庵はいくつかの建物群の総称で、宮田らが他所の建物を購入して移築したものが多

い。中でも、宇喜田秀家の息女が久我大納言家に嫁した際に持参した茶室「皆如庵」を移築した離れは特筆される。もちろん、宮田にその財力はなく、寄付金を募って実施したのだが、このときの中心人物が日本最後の文人画家とされる富岡鉄斎である。西行庵に現存する勸進文「東山西行庵再建文」には鉄斎を筆頭に京都府議會議員・京都市会議員・商工会議所関係者など当時の名士三十三名が名を連ねており、宮田あるいは鉄斎の人脈の広さが想像できる。

宮田と富岡鉄斎の接点は不明な点が多いが、鉄斎は安政六年(一八五九)、明治五年(一八七二)、明治二十年(一八八七)、明治

三十三年(一九〇〇)の都合四回福井県を訪れており、特に三・四回目の来訪時に鯖江・武生の丹南地域に多くの時間を割いている。このときの縁故が宮田と鉄斎を結びつけた可能性は低くないであろう。しかし、何より鉄斎自身が慈善活動で知られる歌人の大田垣蓮月尼と交流があり、自身も「自分は幼少の時から、聊か国家のために貢献しようと思つて、聖賢の道を学び、精勵刻苦したが、そのことは一向世道人心に用をなさず、却つて余技として習い覚えた絵画の技が、斯く賞せらるるに至つた。これは誠に慙愧に耐えぬ次第である」(青木勝三『文人書籍十二 鉄斎』一九七九年)と記しているように、篤志家としての人物像が明瞭で、すでに京都で寺社や名所・旧跡の復興に尽力していたことが大きな要因であった。西行庵再建を任された宮田小文にとつて、すでに文人画家・篤志家としての地位を築いていた富岡鉄斎との交流が大きく幸いしたことは間違いない。そして、鉄斎と宮田を結びつけていたものは茶道を軸とする交友関係であったと思われるが、このことを示す具体的な資料は今のところ見つかっていない。

西行庵再建後、宮田は僧籍を得て庵主と

なつた。昭和四年(一九二九)、七十八歳で亡くなるまで慈悲深く、義侠心厚く、人の困難を見ては私物を惜しまず人を援けた。生涯、独身であつたという。



東京例会

七月十三日(土)(会場・東洋英和女学)

「朝鮮半島に視る茶室(草庵)の原風景」 井上 慶雪

「外から見た茶の湯」 田中 秀隆

九月二十八日(土)(会場・五島美術館)

「唐物茶入の評価史」 竹内 順一

「近藤知新庵と八炉図説」 村上英二郎

静岡例会

七月二十一日(日)(会場・静岡文化)

「天目について」 佐藤 豊三

九月下旬(会場・袋井市立中央・南公民館)

「茶産業における建築」 二村 悟

六月二十九日(土)(会場・名古屋文化)

「点前の変遷」 熊倉 功夫

九月二十一日(土)(会場・名古屋文化)

「中世から近世にかけての茶栽培の変遷」 沢村 信一

近畿例会

七月六日(土)(会場・同志社大学)

「ポストン美術館にみる岡倉覚三(天心)残像」 大和田範子

「利休研究の現状」 谷端 昭夫

九月七日(土)(会場・有斐斎弘道館)

「近世後期大坂両替商の茶の湯(仮)」 倉林 重幸

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

北陸例会

九月十四日(土)(会場・福井県技術センター)

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

「茶経」研究の課題と展望」 高橋 忠彦

窯業指導分所会議室

午後二時～

「越前焼と茶陶について」 日向 光

見学 福井県茶道会館 越知庵

解説：吉江 勝郎

金沢例会

七月七日（日）（会場：石川県文教会館会議室）

午前九時三十分～

「茶の湯の灰・灰と灰形」 北野 宗道

「漆・素材と技法」 西村 松逸

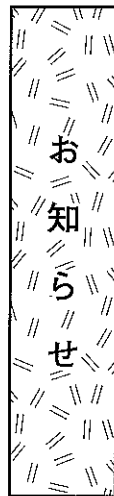
高知例会

九月八日（日）（会場：高知県立文学館）

慶雲庵茶室 午前十時～

文献研究「土佐藩某家老蔵帳」

発表者 森 一康



新刊紹介

\*『松林鶴之助 九州地方陶業見学記』

前崎信也編 宮帯出版社

（定価四、五〇〇円＋税）

本書は、大正八年松林氏によって纏められた調査旅行記で、近代九州陶業史を知る上で貴重な資料。

\*『十三松堂茶会記―正木直彦の茶の湯日記』

依田徹著 宮帯出版社

（定価四、五〇〇円＋税）

教奇者・芸術家・思想家・学者など燦然たる人物交流、美術史、茶道史に新分野を提示する書。

\*『お茶人のための京のいっぴん』淡交社編集局編 淡交社（定価一、六〇〇円＋税）

お茶人であれば手に入れておきたい京のいっぴんを入手できるお店を厳選して、五十三店舗紹介している便利な書。

\*『講座 日本茶の湯全史 第一巻 中世』

茶の湯文化学会編 思文閣出版社

（定価二、五〇〇円＋税）

茶の湯文化学会創立二十周年記念出版の書。最新の研究成果をふまえて茶の湯を通覧する、まったく新しい概説書。全三巻。

\*六月九日の大会場で「ストール」「扇子」「ボールペン」の忘れ物がありました。学会事務局でお預かりしています。

近畿例会々々場（有斐斎弘道館）

